

## 栃木（とちぎ）の正月

正月は、一年のうちで益行事と並ぶ大きな節目となる年中行事です。年の初めの一月一日から三日までを「大正月」と呼び、正月の神様を迎える大切な時期とされています。各家庭では、その準備のため、餅をつく、門松を立てる、しめ縄を飾るなどするほか、様々な風習が引き継がれています。

### <プラス1情報>

#### ○若水汲み

昔は、新年初めの仕事は水汲みでした。家長である男性が年男となり、水の汲み初めである「若水汲み」をしました。1年の初めの水は特別の力があると考えられ、その水を沸かしてお茶を入れ、神仏に供え、家族で飲みました。

#### ○正月の三が日は、女性は休み

正月の三が日には、男性が正月の仕事を行うことになっていて、日ごろ炊事を行っている女性の休日といわれていました。

#### ○年始めの食べ物

正月にはおせち料理、七日には「七草がゆ」、十五日には「小豆がゆ」、二十日には「お汁粉」といったように、縁起をかついたり、健康を祈ったりして食べるように伝わってきたものがあります。



### <正月の餅について>

正月は神様がやってくると信じられていて、それぞれの家では正月の神様（歳神という）を迎えるための準備を行います。

餅つきも正月準備として欠かせないものです。歳神様への供物である鏡餅や食用の餅つきをつきます。餅つきを行う日は地域によって違いますが、「苦（九）餅はつくな」、「一夜餅はつくな」といわれ、二十九日、三十一日は餅つきをさけました。

正月餅は、白餅、うすく伸ばして切った切り餅をはじめ、栃木県では豆（大豆や落花生）を入れた豆餅、青のりを入れたのり餅などをつく家もあります。

元日の朝は、切り餅、里芋、大根、ニンジン、ゴボウ、ネギなどの野菜を入れ、しょうゆ油で味付けした雑煮を食べる家庭が多いようです。また、正月には食べ物に関する家庭での風習もあり、餅を食べない家庭もあります。